
手品師の姪

沖川 英子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手品師の姪

【Nコード】

N8171P

【作者名】

沖川 英子

【あらすじ】

ある街でマジックバーを営む中年手品師のキセ氏の元に、ある日突然押しかけてきた姪。久々の再会を喜んだのもつかの間、彼女は店で働きたいと言いだした。

キセ氏は彼女を雇うことにし、共に店を切り盛りしていくのだが……

誰かに職業を訊かれると、キセ氏は必ず、

「人を騙す仕事です」

と言う。

言われた方はたいていの場合キセ氏が冗談を言っていると思って笑うか、真意を汲み取りかねて曖昧に笑うか、まじまじと彼の顔を見る。たまに真顔で詐欺師ですかと問う人もいる。

「ああ、マジシャンですか」

と頷いてくれるのは、ごく一部の勘の冴えた人だけだ。

分らない人には自分から正体を明かすが、キセ氏はいつも、

「手品師です」

と控えめに言う事になっていた。「マジシャン」なんて呼び名、まるでホテルのステージや洒落たホールで大掛かりなイリュージョンを行うみたいじゃないか。キセ氏は大仕掛けは得意ではない。彼は、小さなボールを手のひらから貫通させたり、机の上のコインを瞬間移動させたりといった、ささやかだけれど摩訶不思議なマジック、「クロースアップ」と呼ばれるものが好きだった。

遠くになだらかな山々が青く霞む町の、繁華街の外れ。古いビル
の4階にキセ氏の店はある。5席のカウンターと3つのテーブル席
がひしめく小さなバーはひっそりと物静かな佇まいで、キセ氏の
人柄をそのまま反映したかのようだ。

来店するお客のほとんどは常連で、同じ面子がしょっちゅう集ま
っては、狭いカウンター席に肩を寄せ合い、ウイスキーを舐めなが
ら低い声でぼそぼそ喋っている。その様を見て、

「秘密結社みたい」

と言ったのはメイコさんだ。曰く、いつも同じメンバーで集まり、
狭く薄暗い店の中でもそもそしているあたりが、レジスタンスだと
か地下組織といった「何かイワクありげな感じの集会」に見えるの

だという。なるほど上手いことを言うものだ、キセ氏はメイコさんのセンスに感じ入ったものである。

メイコさん、というのは本当の名前ではない。彼女が初めてカウンターの中に現れた時、キセ氏が、

「私の姪です」

と彼女を紹介したことから、姪御さん、姪っ子さん、メイコさんと呼ばれるようになったのだ。痩せ面で垂れ下がった眉に象を思わせる瞳のキセ氏と、すっと通った鼻筋にくっきり二重の力強い目を持つメイコさんという取り合わせは、それからこの店のおなじみの光景となった。メイコさんの初登場からもうすぐ1年が経とうという今では、彼女は一端のバーテンダーとして銀色のシェイカーを振っている。

キセ氏の店の売りはもちろん、主人による手品だ。単なるランプやどこにでもあるタバコが、キセ氏の手にかかればたちまち魔術をかけられた道具になる。選んだランプは自動的に選び主の手の中に帰り、タバコはどんどん増えていく。借りたお札が宙に浮き、小さなコインは手のひらいっぱいに巨大化する。

ほろ酔いのお客相手に生み出される奇跡を、メイコさんは美しい瞳を見開いてじっと見つめる。時には力が入りすぎて眉間にしわができることもある。

メイコさんは、キセ氏の弟子なのだ。

正確には、押しかけ弟子と言った方がいいかもしれない。

メイコさんは、ある日突然キセ氏の生活の中に入り込んできた。猫のように音も立てずというのではない、空からドン、と降ってきたかのような、キセ氏にとっては衝撃的な登場だった。

その日、蒸し暑い町を冷やすように雨が降った夏の夕方、キセ氏は潤んだ空気の中をいつものように店に行き、扉を開け、汗をかきかき掃除をして開店の準備をした。定刻に店を開けて、閑古鳥の鳴く中、新しい手品の練習をしているとインターホンが鳴った。（キセ氏の店は扉に仕掛けがしてあって、見破らないと入店できないのだ。分からなければ、インターホンを押すとキセ氏が開け方を教えてくれる）

「すみません、開かないんですけど」

凜とした声が聞こえて、キセ氏はおや、と独り呟いた。若い女性が来るなんて珍しいこともあるものだ。ここの客は、常連の物好きな親父たちか、彼らの連れてくるこれまた物好きな親父しかいないのに。

初来店の客に、キセ氏は丁寧に扉の開け方を教えた。仕掛けをなんとか解いて入ってきた姿を見て、キセ氏は再びおや、と呟く代わりに少しだけ眉を上げた。

声から想像した通り、立ち姿の美しい女性だった。背筋はしゃつきりと伸び、目は店内を物色するでもなくまっすぐこちらを見ている。涼しげな淡いブルーのブラウスとパンツというシンプルな出で立ちなのに、彼女の周りだけが明るく見える。キセ氏と目が合うと、大きめの唇には鮮やかな笑みが浮かんだ。扉を開けたまま、彼女はよく通る声で言った。

「お久しぶりです、叔父さん」

ずいぶんと間抜けな顔をしていたのだろう、キセ氏を見ながら彼

女はふふつと笑った。若い娘に相応しい華やかな表情に、思わずキセ氏の口元もほころんだ。

どうぞ、と案内され、彼女はカウンターに座る。メニューを差し出すと、少しページをめくってカシスオレンジを注文した。キセ氏は頷いて背後のボトルを取った。

「何年ぶりでしょうね、こうしてお会いするの。ずいぶんご無沙汰しちゃって」

長い髪を後ろに追いやりながら彼女は笑う。キセ氏も笑いながら頷き、氷を入れたグラスにカシスリキュールを注ぐ。返事はしなかった。彼女の親しげな口調の中にある他人行儀な丁寧さが、口を開け難くしていた。無言のままオレンジジュースを注ぎ、コースターと共にすつと差し出す。

ありがとうございます、と呟いて彼女は一口含んだ。しばらく、どちら目も合わさず、何も喋らなかつた。ぎこちない空気の中、ジャズのCDが控えめに流れていた。

無理もない、とキセ氏は胸中で呟いた。何しろ、最後に姪に会ったのは、まだ両手で彼女の歳を数えられた頃なのだ。目の前の女性は、咎められずに酒を飲める歳になってから何回か誕生日を迎えているだろう。もう20年近く顔を見ていないことになるのだ。どんな風に話していいのかまったく分からない。

少しためらって、キセ氏は口を開いた。

「兄貴は相変わらず？」

カシスオレンジに視線を落としていた彼女はぱつと顔を上げた。真ん中で両分けにした髪が目にかかるのをうるさそうに払いながら、「ええ」

と苦笑する。兄貴、と口にした瞬間、20年近く前に絶縁した兄の顔を久しぶりに思い出した。あの頃はまだ若かつた兄も、今頃は頑固なしわを顔に刻んだ中年男になっているのだろう。そう思うと胸に苦い記憶が甦った。

キセ氏の兄は真面目すぎるほどの大真面目、曲がつたことを嫌う

頑固一徹な男で、一回り近く歳の離れたキセ氏にとっては頭の上がない存在だった。宿題をサボれば容赦なく鉄拳が飛んだし、嘘をつけば頬を叩かれた。キセ氏が15の歳に父親を亡くしてからはその厳しさに磨きがかかり、何かにつけ窮屈な思いをしたものである。そんな兄だから、キセ氏が手品の道に進むと決めた時には大騒ぎになった。まっとうな勤めに出ない上に人様を騙す輩になるとはどういうつもりかと、兄嫁の静止を振り払ってキセ氏の胸倉を掴み怒鳴りつけたのだ。怒髪天をつくとはまさにこの事かという怒り様で、キセ氏は兄の罵倒を受けながらも密かに仁王像を思い出したくらいだ。

兄を酷く怒らせながらも、キセ氏は結局、自分の行きたい道に進むことにした。激怒した兄からは絶縁を言い渡され、キセ氏は故郷を後にした。

それを最後に、キセ氏は兄にも、その家族にも会っていない。

「急に叔父さんに会っちゃいけないって怒られて、私、とても悲しかったです」

目の前で懐かしそうに笑う女性には、遠い昔に幾度も手品を見せてやった少女の面影は無い。

20年とはかくも長いものかと、キセ氏は改めて過ぎ去った年月を思った。

「すまなかったね」

「いいえ」

首を振り、彼女は氷の溶け始めたカクテルを飲む。その所作を見ながら、キセ氏は何気なく言った。

「よくここがわかったね。見つけづらかっただろう」

問いには答えず、彼女はグラスからずっと口を離し、キセ氏の目をじつと見つめ静かに笑った。その秘密めいた視線に妙にどぎまぎしてしまい、キセ氏は慌てて目をそらす。そのついでに、

「そうだ、これ、覚えているかな」

自分から話もそらしてしまった。

キセ氏はジョーカーを抜き絵柄の面を上にしたトランプを、片手できれいな扇状に並べる。その中から1枚選ぶように促すと、彼女はさして迷うでもなくぱつと無造作に1枚引き抜いた。

「スペードの5だね」

「ええ」

「覚えたら、この中の好きなところに差し込んで」

キセ氏の手の中では、先ほど広げたトランプが裏向きにきれいに重ねられ、整えられている。

その中ほどに、スペードの5がずっと差し込まれる。

キセ氏はトランプを二つに割って重ね、また二つに割って重ね、と素早い手つきで幾度もシャッフルし、右手にトランプを持つ。手に少し力を入れると、52枚のカードは小鳥が羽ばたくように、音を立てて左手に飛んだ。彼女は目を丸くして、鮮やかなそのカード捌きを見ていた。

再びトランプを整え、キセ氏は一番上のカードをひっくり返す。その絵柄はダイヤのクイーンだ。キセ氏はおや、と眉を上げる。

「女王陛下に気兼ねしているのかな」

キセ氏はパチン、と軽やかに指を鳴らす。

「さあ、一番上のカードを取ってみて」

彼女は言われるままにカードを取り、表に向けた。

「あっ！」

アーモンド形の目が大きく見開かれた。細い指は、スペードの5を摘んでいた。

「何で、どうしてカードが上がってきたの？」

20年近くの時を戻したような表情に、キセ氏は思わず微笑んだ。

「子供の頃、あんなに見せたじゃないか」

「不思議なものは不思議なんです」

何で、何で、とスペードの5をまじまじ見つめる瞳からは先ほどの秘密めいた色がすっかり消え、子供のような無邪気な驚きが現れている。

トランプを使う手品はキセ氏の得意中の得意だった。節くれだつた指を駆使してのカード捌きは滑らかで隙がなく、タネの分かっている手品師仲間でも見とれるほどだ。キセ氏のカードマジックを見たいがために、通いつめる常連客も多かった。

けれど、最初にして最も熱心な観客だったのは、他でもない幼い頃の姪だ。キセ氏を慕い幾度も手品をせがむ彼女を驚かせ、喜ばせたいがため、若かったキセ氏は必死になって腕を磨いたのだった。

「でも、意外だったな」

「え？」

カードを整え片付けながらキセ氏は笑い混じりに言った。

「昔、カードを使う手品をやると、お前はいつもハートの7を選んだたろ？おかげでこっちは楽だったけれど。今回は選ばなかったんだ」

「それは……」

彼女は言葉を搜すようにわずかに目を泳がせ、一瞬の後に、にっと微笑んだ。

「それは、私も大人になったってことですよ」

キセ氏は静かに頷き、それ以上は何も言わなかった。

一つの手品をきっかけに固かった空気がほどけ、彼女は長い空白の時間を埋めるように近況について語り始めた。

地元でトップの進学校を卒業し名のある大学に通ったこと。その間にいくつかの恋愛をしたこと。つい最近会社を辞め、今は求職中であるということ。

薄暗い店内を華やかに彩る笑顔を見つめながら、キセ氏はただうんうんと頷きながら聞き役に徹していた。余計な口を挟んで話の流れを止めたくなかった。

一通り話が済むと、彼女は残り少なくなっていたカクテルをぐつと飲み干し、グラスを置いて手を組んだ。沈黙の中、キセ氏はそつとグラスを下げる。と、美しく彩られた指先が落ち着かなく動いて

いるのが見えた。

キセ氏は彼女の顔を見た。

俯き加減の瞳が落ち着きなくうついている。

やがて、決心するかのように両手をぎゅっと組み合わせると、

「あの」

彼女は顔を上げた。真剣な眼差しがキセ氏を捕らえた。

「叔父さん、お願いがあるんです」

すつと大きく息を吸う。

「私を、雇ってもらえませんか？」

キセ氏が黙り込んだのは返事をしかねたからではない。突拍子もない申し出に驚き、声が出なかったのだ。

「急に、どうして……」

目をぱちぱちしながらやつとのことで言葉を搾り出す。だが、突然の申し出に慌てる一方で、

「大丈夫なの？」

と問うだけの冷静さも持っていた。

キセ氏の店と兄一家の家はかなり離れており、特急を使ってやつと日帰りできるかどうかといったところだ。毎日行き来するには相応な時間と費用がかかるし、ましてや夜の仕事となれば当然終電はない。あの頑固な兄が朝帰りを許すとは到底思えない。

そしてそれ以前に、大事な一人娘が絶縁した弟の下で働くなど、兄が承知するはずもない。

この問題について訊くと、彼女は上目遣いに苦笑した。

「それが……実は、私、家出しちゃったんです」

キセ氏は返事をする代わりにぽかんと口を開けた。

父親と折り合いが悪いのだと、彼女は打ち明けた。何かにつけ厳しくあたる父親と馬が合わず、これまでも二人は事ある毎に反発し合い、壮絶な争いを繰り広げて来たらしい。先日彼女が退職した折にも大きく衝突し、親子の間の亀裂はついに修復不可能なほどに広がったのだという。

「そのうち家を出ようと思ったところなので、丁度いいやつて、飛び出してきちゃったんです」

言いながら、彼女はいたずらっ子のように笑った。

実家を飛び出してせいせいしたものの、さてどうしようかと考えた途端、彼女は行く当てが無いことに気づいた。実家の近郊では何かの拍子に父親に居場所が知られかねないし、かといって全く縁故のいない土地に行っても途方に暮れるだけだ。そこで思い出したのが、キセ氏だったのだという。

「叔父さんがこの辺りでお店をやっているらしいってこと、聞いていました。ずいぶん昔のことだから、もう引越しちゃってるかもしれないけど不安でしたけど。でも、ちゃんと会えましたね」

微笑む彼女を見ながら、そういえば、とキセ氏はやっと思い出した。確か、10年ほど前にこの店を開いたとき、世話になった兄嫁に宛ててダイレクトメールを送ったのだ。自分が元気でやっていることも伝えたかったし、もしや彼女が兄との間を取り持つてはくれまいかとも期待していた。

結局、彼らが来店することは無かった。少し落胆はしたものの、そんなものだと思います、いつしかキセ氏は手紙を出したことをすら忘れてしまっていた。

だが、その時投じた一石はこんな思いもよらぬ形で返ってきたのだ。

キセ氏の中に温かいものが広がった。長年のしこりが、ほんの少しだけほぐれたように思えた。

「分かった」

キセ氏は彼女を雇うことにした。個人で細々と経営しているバーではあるが、従業員一人分の給料を支払えるだけの売り上げはある。もしかすると、新たな仕事を見つけられるまでのつなぎで働きたいだけなのかもしれないが、それならそれで良いとも思った。

キセ氏の言葉に、彼女の顔はぱっと輝いた。

「やったあ！」

と大人らしからぬ口調ではしゃぎ、ありがとうございます、と何度も口にする。その様子を笑顔で見守っていたキセ氏は、しばらくして、

「ただし」

と咳払いをした。

「雇ってもいいけど、守って欲しいことがある」

真面目ぶった口調で言うと、彼女も背筋を伸ばし、雇用成立の宣言にほっと緩んだ顔を引き締めてキセ氏を見る。

厳かに、キセ氏は彼女の目を見ながら言った。

「一つ、良きバーテンダーたるべく、努力すること。二つ、良き手品師たるべく、努力すること。以上」

「……それだけ？」

バーの主は重々しく頷く。なあんだ、と拍子抜けして、彼女は姿勢を崩した。

「そんなの分かってますよ。ここ、マジックバーなんでしょう？お酒が作れて、マジックができなきゃいけないって事くらい、私だって知ってます」

子供のように口を尖らす彼女に、キセ氏は穏やかに言う。

「そうは言ってもね、この二つは基本だからね」

「はぁーい」

ふてくされたように言ったが、次の瞬間に彼女の口には抑えきれない笑みが浮かんでいた。

給料や待遇等について簡単に話を決め、互いの承諾が取れたところで、キセ氏は彼女にカクテルのお代わりを、自分にウイスキーの水割りを作った。

「じゃあ、これからよろしく」

「こちらこそ、よろしく願います」

『乾杯』

最初の一口を、二人してぐつとあおる。乾杯でいきなりグラスの4分の1を飲み干し、彼女は猫のように目を細めて満足げに息をつい

た。

「でも、叔父さん」

「うん？」

カラカラとグラスを揺らしながら、彼女はカウンター越しにキセ氏に問う。

「良きバーテンダーっていうのは何となく想像つきますけど、良き手品師って、どういうこと？」

「そうだなあ、色々あるけれど……」

キセ氏はしばし空を見つめ、合点したように頷くと柔らかな眼差しを彼女に向けた。

「相手を気持ちよく騙す、ということかな」

沈黙が訪れた。

だが、それもほんの一瞬のことで、すぐに彼女の朗らかな笑い声が静かなバーに華やかに響いた。

キセ氏は幾度も頷きながら、穏やかに微笑んでいた。

こうしてメイコさんはこの小さなバーで働くことになったのだった。

押しかけるように従業員兼弟子となったメイコさんだったが、本人曰く「学生時代にバーでアルバイトをしていた」とのことで、バーテンダーとしての基本的な技術はしっかり身につけていた。

口の悪い常連客など、

「キセさんより、メイコさんの方がバーテンダーって感じたなあ」
などとからかうほどだ。

確かに、キセ氏はお酒に関しては覚えが悪く、複雑なレシピとなると「えーっと…」と小声で呟きながらリキュールボトルを探す始末だった。

けれど、そもそもこの店では、カクテルの注文自体がほとんど無いのだから仕方がない。店に来る客の9割は常連客、そして彼らの注文の9割強がウイスキーで、違いといえば銘柄と飲み方だけなのだ。そのかわり、キセ氏は氷や水にはこだわっていたし、ロック用の丸氷を作るのは大得意だった。

メイコさんは、初日からとても入りたてとは思えない堂々たる動きと接客を見せ、「知らない女がいるぞ」という常連客の無言の緊張を解きほぐした。それだけでなく、メニューに無い注文にも即座に応えてみせたので、キセ氏は密かに舌を巻いた。「良きバーテンダーたるべく、努力をすること」などと偉そうに訓示を垂れたのが恥ずかしいくらいだ。

メイコさんの動作は水が流れるように滑らかで、無駄なくぴしつと決まっている。本人もお酒の腕を磨くのは楽しいようで、レシピ本やバー関連の本を買ってきては熟読し、技術の習得に勤しんでいた。

元々ウイスキーやバーボンが中心でカクテルは申し訳程度だったメニューブックは、メイコさんが勤務を重ねることに分厚くなり、常連以外の客層も少しだが増えつつあった。まだ採用には至らない

ものの、オリジナルカクテルもいくつか創作されており、店の目玉が増える日も近いのではとキセ氏は期待している。

キセ氏の店がそれまでの「手品8割、バー2割」という状況から何とか「手品とバーが半々」というところまで漕ぎ付けられたのは、メイコさんのおかげだ。キセ氏は彼女に深く感謝していた。

一方でなかなか進展しないのが手品の腕で、こちらに関してはメイコさんは専らアシスタントに徹し、キセ氏の手から生み出される奇跡の数々に、お客と一緒に驚く具合だった。

「まあ、いきなりはできないさ」

練習が上手いかずメイコさんが落ち込むたびに、キセ氏は言った。

「たった数回で覚えられたら、私の立場が無いしね」

「そうですけど、手品師の姪としてこれはまずいでしょ」

言ってトランプをシャッフルする傍から1枚、2枚とカードが落ちて行く、といった状態で、基本からなかなか進歩しない。だが、空いた時間にトランプをいじってみたり、コインを手の中に隠す練習をしたりと、「良き手品師たるべく」努力は怠っていないので、キセ氏はそれで良しとしていた。

入店から数ヶ月の後、メイコさんはやっと一つ、トランプの手品を披露できるようになった。キセ氏と比べればまだまだだが、ぎりぎり合格ラインといったところだ。

常連客はメイコさんのぎこちない手つきやおかしな口上ををからかいながらも、自分の選んだカードを当てられた時には大喜びで拍手喝采した。メイコさんは花が咲いたように笑って大はしゃぎした。キセ氏も負けてはいない。本人曰く「老い始めた脳みそにムチ打って」メイコさんのレシピブックを読み、順々にカクテルを覚えていった。粉雪が舞い散る頃には、分厚いメニューの中身をすべて覚えたとはいわないが、少なくともメイコさんが休んだ時の代打は充分勤められるようになっていた。

「叔父さんも、良きバーテンダーたるべく、努力してますね」

キセ氏作のダイキリを試飲しながら、お酒の先生・メイコさんは頷

く。キセ氏も眉をひょいと上げ、得意な顔で頷く。

脳までとろける暑い夏に結成したキセ氏とメイコさんのコンビは、トンボが飛ぶようになって、木の葉が色づいても、町がイルミネーションに華やいでも、桜が咲いても散っても、変わることなく常にカウンターの向こうにあった。

そうして、慈雨の季節が過ぎ、いつの間にか町では、セミがけたましく歌うようになっていた。

最後の客が蒸し暑さの残る夜の町に消えるまで見送って、メイコさんは盛大に伸びをした。

「あー、疲れたあ。暑い」

「さっきまで、冷房が効きすぎて寒いつて言ってたじゃないか」

「そうですね、外に出たらやっぱり暑かったんですもん」

何なんでしょうね、夜になってもこんなに暑いなんて異常だわ、と文句を言いながらメイコさんはエレベーターのボタンを押す。並んで4階まで上がると、メイコさんは仕掛け扉を慣れた手つきで難なく開けた。

店は閉まっても、二人にはやることがある。売り上げの計算、レジ閉め、簡単な掃除、そして、手品の練習だ。

「さ、それじゃあやろうか」

キセ氏はカウンターの向こうに回り、メイコさんはその前に座る。カウンターの内側から紙とペン、灰皿、マツチを取り出し、何をするのかと目を輝かせているメイコさんの前に並べた。

「今から教えるのは、心を読む方法だよ」

言いながら、キセ氏はメイコさんに紙とペンを差し出す。

「ここに、私に言いたいことを書いて欲しい。給料上げるとか、休みをよこせとか、何でもいいよ。口では言いにくいことってあるだろうから。ただし、心からの声でないと駄目だ」

キセ氏はくりと後ろを向いた。リキュールボトルと対面しながら、背中の方こうでメイコさんが少し悩み、やがて何かを書き付け始めたのを聞いていた。

しばらくして、

「書きましたよ」

という涼しげな声が聞こえる。

「じゃあ、それを私に見えないように、文字を内側にして折りたた

んで。なるべく小さくね」

紙を折る密やかな音のあと、声をかけられて、ようやくキセ氏は前を向いた。メイコさんはほっそりした指先に、数センチ四方に折った小さな紙を摘んでいた。

それを受け取り、キセ氏は灯りにかざして中の文字が透けないことを確認する。

「見えないね？」

「はい」

「では」

キセ氏は灰皿を手元に寄せると、紙を小さく破り始めた。

1回、2回、3回。

手の中で重ねながら、幾度も紙をちぎる。その様子をメイコさんは息をつめてじっと見つめる。

破り終えた紙を灰皿の中に入ると、キセ氏はマツチを1本擦った。つんと鼻を突く臭いと同時に炎があがる。キセ氏は確かめるようにメイコさんの前で軽く振って見せると、それを灰皿の中に放り込んだ。

「あ」

メイコさんがぽかんと見ているうちに、火は紙を舐め、すぐに大きな炎となった。

キセ氏はその上に右手をかざし、すっと目を閉じる。

「この炎から、書いてもらった文字、君の心の声を読み取ろう」
それまで食い入るように灰皿を見つめていたメイコさんは、え？と視線をキセ氏に転じ、思わず息を呑んだ。

白いシャツの手首をきちんと留め黒いベストを着たキセ氏は、いつもの穏やかな表情から一転、下がり気味の眉をしかめ、厳かな顔をしていた。かざした右手が、ゆっくりと、幾度も灰皿の上を行き来する。

炎の声を聞こうというように。

メイコさんの心の声を聞こうというように。

そこにいたのは、今まさに奇跡を呼び起こさんとする、一人の魔術師だった。

メイコさんは、息をするのも忘れていた。

しばらくして、キセ氏は、ふっと目を開け、右手を下ろした。灰皿の中では、まだ炎が小さくなりながらも揺らめいている。メイコさんもふう、と息を吐いた。張り詰めていた空気が緩んだ。

「叔父さん、私の書いたこと、分かった？」

メイコさんはささやくようにそっと口を開く。キセ氏はいつもの落ち着いた声で、

「ああ。炎から伝わったよ」

と頷きながらも、不思議そうな顔をする。

メイコさんは厚い唇に静かな笑みを浮かべた。

『ごめんなさい』

二人は同時に口にした。

それこそ、メイコさんがキセ氏に伝えたいことだった。

「別に、謝られるようなことはないと思うけど……」

「だって、私、ご迷惑おかけしてますから。いきなり押しかけて雇えなんてお願いしたし、手品は相変わらず落ちこぼれだし。きつとこれからも叔父さんを困らせます」

「いやいや」

キセ氏は灰皿に少量の水をかけながら首を振る。

「私は充分助けられているよ。おかげでずいぶんとバーらしくなっ
たし、お客も増えた」

湿らせた灰を拭くと、キセ氏は穏やかな笑みを浮かべて灰皿をカウ
ンター上に戻した。

キセ氏がタネを明かすと、メイコさんは、

「なあんだ」

と少しがっかりしたようだった。

「本当に心を読んだのかと思ったのに」

「そりゃ手品なんだから、タネも仕掛けもあるよ」

手品師の弟子らしからぬメイコさんのリアクションに、キセ氏は苦笑してしまう。

「それでも、タネを知らない人にとっては読心術なんだから」
さ、次はそっちの番、と道具一式をメイコさんの方へ寄せる。キセ氏に指導されながら、メイコさんはぎこちない手つきで練習を始めた。

時折、

「その破り方だと、文字を読んでいるように見える」

「紙を落とすとき、なるべく文字が表にならないように気をつけて」といった指摘をされ、その度にメイコさんは頷いてやり直す。灰皿に積もった紙の山を捨て、そこに新たな紙をちぎり入れ、それが積もって再び山となる。

うだるような夏の夜の底で、手品師とその弟子は静かに、しかし熱を帯びながら、秘密めいた儀式のように幾度も同じことを繰り返す。

遠くに響いていた電車の音も、いつの間にか聞こえなくなった。

いつしか、かなりの時間が過ぎていた。

「もう、これくらいにしようか」

時計を見ながら、キセ氏は練習の終了を宣言した。メイコさんはふう、と息をつき、指先をこすり合わせる。

「紙の破りすぎで手が痛いです」

「ずいぶんやったからね」

キセ氏は手元のメモパッドをぱらぱらとめくる。買ったばかりなのに、すでに紙の半分近くはメイコさんの犠牲になっていた。

「まあ、でも、良い手品だから。覚えておくといいよ」

マッチ、紙、ペンを一まとめに片付け、水でゆすいだ灰皿をペーパータオルで拭く。メイコさんは、うーんと伸びをしながら頷いた。

「確かに、インパクトのある手品ですよ」

「インパクトも大事だけど」

「大事だけど？」

カウンターの下にしゃがみ込んで灰皿を戻し、ひよい、と顔を上げると、カウンターに身を乗り出してメイコさんがこちらを覗き込んでいる。

キセ氏はシンクに手を着いて身を起こし、気障っぽいことを言うようだけど、と前置きをした。

「親子だって恋人同士だって、お互いの心の中を知ることとはできない。人の気持ちを理解するのは難しいし、きっと本当に深いところまで分かり合う事はできないだろう。でも、この手品じゃ心が通じる。分かってももらえたって気になれるんだよ。例えばタネがあつたとしてもね。それって、素敵なことだと思うんだ」

少し照れくさげなキセ氏の言葉に、メイコさんはふふつ、と笑う。「そうですね。叔父さんにも、私の心は伝わったし」

目を伏せたその表情がどこか寂しげに見え、キセ氏は少し驚いた。メイコさんの瞳はカウンターではなく、その向こうの、彼女にしか見えない何かを見ているようだった。

だが、それもほんのわずかな間のことで、次の瞬間にメイコさんはぱつと顔を上げ、笑顔で腕まくりをした。

「さ、それじゃ片付けしましょうか」

いつもの通りの、元氣なメイコさんだ。

キセ氏は頷き、事務所の掃除用具入れに向かった。先ほどの憂いを秘めた眼差しが気になりつつも、きつと薄暗い店の照明のせいだろうと結論付け、モップと塵取りを取り出した。

二人で手分けして店内を片付け、売り上げの処理をしてレジを閉め終わった時には既に未明と呼ばれる時刻になっていた。キセ氏はふう、と息をつく、と、売上金を夜間金庫用の袋にしまう。メイコさんが来てから店の売り上げは右肩上がり、袋はなんとか立体的な姿を保てるようになっていた。今までも決して悪くはなかったが、歴代の売り上げ最高記録を毎日のようにたたき出しているのだからすごいものである。もしかすると、メイコさんは招き猫が化けてい

るのかもしれない。

事務所から鞆を取り出し、キセ氏は着替えを済ませたメイコさんに声をかけた。

「じゃあ、帰ろうか」

「あ、叔父さん」

メイコさんはショルダーバッグをぽん、とカウンターに放った。

「私、さっきのやつ、もうちょっと練習してきます」

「え？」

「家でやってもいいんですけど、集中できないから。ここでやりたいんです」

いいですか？と一応訊くものの、メイコさんは居残り練習をする気満々でカウンターの内側に入り込み、灰皿を取り出している。

今までもこうやってメイコさんが「自主練」と称して残ったことは何度かあった。店の戸締りを任せても問題はなかったし、キセ氏が体調不良で早退した時は、夜間金庫への預けをお願いしたことだ。ある。メイコさん一人を残すことに、キセ氏は何の不安もなかった。

唯一心配なのは帰り道だが、メイコさんはタクシーを使うから大丈夫だと言う。

「ついでに夜間金庫にも行ってきますよ。叔父さんが一人で歩いて行くより、私がタクシーで寄り道するほうが安心でしょ」

それもそうだ。キセ氏は頷いて、夜間金庫の袋と店の鍵をメイコさんに預けた。

「明日は休みだけど、鍵大丈夫？」

「平気です、ちゃんと預かるときますよ」

「色々付いてるから、気をつけてね」

「分かってますって」

おかしそくに笑ってメイコさんは鍵をちゃらちゃらと揺らす。それがバッグの中にしまわれたことを確認し、キセ氏は頷いて扉を開けた。

「じゃ、あまり遅くならないように」

「はい。おやすみなさい」

メイコさんは手を振る。キセ氏は右手を上げてそれに応え、店を出た。閉まりかける扉の細い隙間から、メイコさんの笑顔が見えた。

それが、最後だった。

二日後、店に出たキセ氏は扉が施錠されていない事に驚き、慌て店内に飛び込んだ。しんと静まりかえった店はきちんと片付いていたが、酒屋などへの支払い金を入れていた金庫は空っぽの中身を寒々と晒していた。カウンターのの上には、白い紙が1枚残されており、飛ばないように鍵で重石がされていた。

キセ氏は震える手でメモを拾い上げた。

ごめんなさい

流れるようなメイコさんの字だった。

むっと空気のこもった店の中に、キセ氏は呆然と立ち尽くしていた。

その日、いくら待ってもメイコさんは現れなかった。

売上金と、金庫内のお金と共に、メイコさんはキセ氏の前から姿を消した。

キセ氏はメイコさんのことを警察に通報しなかった。無くなった額は決して少なくなかったが、幸いこのところ売り上げが良かったこともあって、結構な金額がストックしてあったのだ。店の経営にすぐに困ることもない。

それに、キセ氏はメイコさんを　メイコさんだった女性を、糾弾したくなかった。そんなことをした所で、どうにもならないと思っていた。

ただ、喪失感だけはどうしてもなかった。メイコさんのいなく

なった店は灯りが消えたようで、キセ氏は通夜の席にいる気分だった。一年前まではこれが当たり前だったということが信じられない。あの明るい笑顔なしで、自分はどうやっていたのだろう。

それでも、きつと慣れてしまうのだろうとキセ氏は思った。突然現れたメイコさんが、いつしかいて当たり前前の存在になったように。彼女のいない寂しさにも、すぐに慣れる。

常連客には、メイコさんは実家の都合で帰ることになったと伝えた。どの客も残念そうに顔をしかめ、

「寂しくなるね」

と口々に言った。中には、

「俺、今度メイコちゃんに一周年祝いのプレゼント持って来ようと思ってたんだ」

とキセ氏に打ち明ける人もいた。

メイコさんは、店の顔として愛されていたのだ。

メイコさんを惜しむ数々の言葉に、キセ氏はいつもの通りに穏やかに笑って、

「今度会ったら、伝えておきます」

と応えた。

その機会がいつ訪れるかは分からない。普通に考えれば、メイコさんが戻ってくることは二度とないのだから。

それでも、キセ氏は「今度会ったら」という文句を使った。「ワン・ツー・スリー」という手品の決まり文句のように、思いを込めて。

今度会ったら。

会えることがあるならば。

閉店した店の中で、キセ氏は独り、レジを叩いていた。

ピッピ、という軽やかな電子音の合間に、風の音が聞こえる。天気予報では、今日のこの北風が木枯らし1号だと言っていた。古いビルを揺らすように、強風は容赦なく吹き付けている。

この分では、外はかなり寒いのだろうとキセ氏はぼんやり思った。コートを着てきたほうが良かったかもしれない。厚着だから大丈夫だろうと、置いてきてしまったが。

レジを閉め、キセ氏はうんと伸びをする。売上金を鞆の中にしまいこみ、店の鍵を手取る。今日の業務はこれでおしまいだ。

鞆を抱え、椅子から立ち上がった時だった。

唐突に、インターホンが鳴った。

思わずびくつと肩をあげてしまった自分を恥じつつも、キセ氏はすぐにはインターホンを取らなかった。閉店の看板は扉の前に掲げている。時間も時間だし、普通の客であれば、それを見てわざわざ入店しようと試みるはずが無い。

物騒な客か、単なる酔客のいたずらか、それとも晩秋の幽霊か。

キセ氏は店の中でじつと息を殺していた。

再び、ピンポン、と電子音が鳴った。

意を決し、キセ氏はそつとインターホンに近づき、静かに受話器を取った。

「はい」

「……開けて」

受話器の向こうから小さな声が聞こえる。キセ氏の胸は大きく波打った。聞き覚えのある声だった。

受話器を置き、鍵を外して取っ手を掴み静かに扉を開いた。入り口に立っていた人物は、ふらりと揺れながら、キセ氏にぶつかるようにして入ってきた。

メイコさんだった。

ふらふらと不安定に揺れる体を慌てて支え、キセ氏はメイコさんをテーブル席に座らせる。メイコさんはそのままテーブルに突っ伏し、しばらく動かなかった。

「大丈夫？」

キセ氏が声をかけると、

「お水」

くぐもった声が返る。キセ氏はコップに水を入れ、彼女の前に置いた。メイコさんは顔を上げ、覚束ない手つきでコップを掴むと勢い良く飲んだ。

数ヶ月ぶりに会ったメイコさんは、あの時とは別人のようだった。美しかった瞳には力がなく、目の下にはクマができている。顔色が悪く、肌はぱさぱさと荒れており、疲れているのが一目で分かる。

どこかでかなり飲んできたようで、メイコさんの吐く息からはきついお酒の臭いがした。キセ氏はカウンターからデキャンタを取り出して水を満たし、メイコさんの傍に置いた。

俯いたまま、メイコさんは返事をしない。

ここを出た後メイコさんが何をしていたのか、あのお金をどうしたのか、キセ氏は訊かなかった。ただ、時折彼女が発する、何なのよあの男、だの、裏切り者、だのという呟きでおぼろげに事情を理解した。

キセ氏はメイコさんの向かいに黙って座っていた。

店の中には木枯らしの吹く音だけが響いていた。

しばらくして、メイコさんはむくつと起き上がり、水を飲んだ。とろんとした目つきでコップを置き、空を睨む。その視線がゆっくりと降りて、キセ氏の目とぶつかった。

メイコさんは、ふっ、と笑った。

「通報しないの」

キセ氏はゆっくりと首を横に振る。

「へーえ」

馬鹿にしたようにメイコさんは幾度も頷く。

「何で？あたしに恩売るつもり？それとも見逃す代わりにあんたに何かしろっての？」

お酒に掠れた声で畳み掛ける口調は荒く、顔には歪んだ笑みが貼りついている。キセ氏はすつと目を閉じた。真つ赤に潤んだ目をしながら悪態をつく彼女に、なんと言葉をかけて良いか分からなかった。

「違うよ」

息を吸い、目を開けて、まっすぐメイコさんを見つめる。アーモンド形の瞳が少ししたじろいだように揺らいた。

動揺を隠すように、メイコさんはふん、と鼻で笑った。

「そうよね、あんたも悪いもんね。どこの誰とも知れない女の嘘を信じて、雇ったんだから」

馬鹿みたい、いい歳して騙されて、と吐き捨てる。

キセ氏は静かにメイコさんを見つめた。下がり気味の眉のせいで、その表情は泣いてるように見えた。

「君が本当の姪じゃないことは、知っていたよ」

穏やかな言葉に、メイコさんの顔から拭い去ったように笑みが消えた。

「どういうこと」

すつと首をもたげ蛇のように睨みつける。その目を見返しながら、キセ氏はゆっくりと口を開いた。

「最初は、本当に本物なのかと思ったけれどね。話すうちに違うんだろうなと気づいた。まあ、理由はないし、勘みたいなものだけだ」

兄との確執など、身内でしか知りえない話を知っているメイコさんを、しばらくの間キセ氏は信用していた。だが、それもほんの少しのことだ。話すうちに、小さな齟齬や曖昧な記憶が出始め、キセ氏はおやつと思った。

後ろ暗い連中との付き合いがありそうな彼女のこと、キセ氏の身辺調査などあつという間だったに違いない。大まかな事情を掴んだ

後は適当に話を合わせ、姪に成りすますつもりだったのだろう。

ただ、さすがに小さな事 幾度も見せた手品や、いつも選んでいたカードなど までは、調べ切れなかったのだろう。そんな小さなほころびがキセ氏の中で違和感として残ったのだ。

「……さすがに今回みたいなのは、あたしも無茶してとは思ってたわよ。上手くいけばラッキーくらいに考えてた」

メイコさんは静かに呟いた。

「でも、ここみたいに個人でやってて、店主の周りにあたしが成りすませる人間がいて、そこそこ儲けてるとこなんてなかったから」要するに、入り込みやすい店だったということだ。「今回みたいなのは」と言う言葉にメイコさんの辿ってきた暗い道を感じ、キセ氏は胸が締め付けられる思いがした。

「ここのは、どうやって？」

彼女は、有名な酒販会社が運営するバー紹介サイトの名を口にした。「あんた、前に取材されてたでしょ。気をつけなさいよ、どんなやつが見てるか、分かったもんじゃないんだから」

あたしが言うことじゃないけどさ、と笑う。

キセ氏が取材を受けたのは一年半前のことで、そのページはプリントアウトして、事務所のファイルに大事に取ってある。記事をきつかけに常連になってくれた客もいるが、まさか違う意味で目をつけていた人間がいたとは。あけすけな物言いにキセ氏も思わず苦笑してしまった。

あはは、と場違いに明るい声で一しきり笑ったかと思うと、メイコさんはその余韻を断ち切るようにすつと息を吸い、真顔になった。「なんで追い出さなかったのよ。偽者だって分かってたんでしょ」知ってたんでしょ、詐欺だって。

鋭く切りつける声を、キセ氏は静かに受け止める。

「何でだろうね」

テーブルの上で手を組み、胸の内に沈んでいる思いを掬い上げるように俯いて目をつぶる。メイコさんは厳しい顔でキセ氏を睨みつけ

ていた。答え次第ではいくらでも罵倒できるよう、胸のうちに沢山の言葉を用意していた。

窓の外からは風音が聞こえる。

木枯らしの吹き荒れる中、しんと静まる店内で2人は身じろぎもなかった。

やがて顔を上げたキセ氏の口には、微かな笑みが浮かんでいた。
「騙されてもいいって、思ったのかな」

メイコさんは訝しげに目を細める。

「というより、騙されたかったのかもしれない」

「何よ、それ」

「私には血の繋がった肉親がいて、一緒に店を切り盛りしている。親しく助け合っている。嘘でもいい、たった一時でもいいから、そう信じたかったのかな。そういう夢を見たかったんだろうな」

キセ氏はふふつ、と静かに笑う。自分でもおかしくてたまらない、と言うように。

メイコさんは目を伏せた。予想しなかった答えとキセ氏の翳った笑みに戸惑い、どう応えて良いか分からなかった。

二人は俯き、それぞれの手元だけを見つめていた。

「……馬鹿みたい」

メイコさんが顔を上げた。

「バツカじゃないの、そんなつまないことで」

言葉に反して口調は弱々しく、微かに震えている。伏せられた目はせわしなく動くもののキセ氏を見ることは無い。

虚勢を張るメイコさんに、キセ氏はそつと呟く。

「君はそう思うかもしれない。君はまだ若く、気力もあるだろうか」

けれどね、とキセ氏はメイコさんの目を覗き込み、笑った。

「独りで生きるのは、寂しいものだよ」

朝日が昇り、目覚め、誰もいない家で取る朝食。話す相手もいないままに迎える昼。店に出て、ほんの少しの時間客と交わす会話の

心地よさ。そして、暗く静まり返った部屋に灯りを点す時の静けさ。店がなければ、誰とも言葉を交わさずに一日が終わる。

自分など、いてもいなくても変わらないのではないかと、ふと感じる。

その途方も無いやるせなさ。

「……」

メイコさんは何も言えなかった。きゅつと固く結ばれた唇が微かに震えていた。

「タネがばれれば、手品はただのペテンになる。けれども、信じている人にとっては、それは紛れもない奇跡なんだよ」

ゆつくりと、言い聞かせるようにキセ氏は言葉を続ける。ひざの上に手を置き、俯いてじつと目を閉じるメイコさんに向けて語りかける。

「君は立派な手品師だった。私に、お客さんに、この店に、素敵な奇跡を見せてくれた。だから私は、君のことを胸を張って断言できる」

温かな眼差しが、柔らかな声が、メイコさんを包み込む。

「この私の、手品師キセの姪だと」

テーブルの向こうで俯くメイコさんの表情は見えない。けれども、キセ氏はメイコさんの強張った肩から、ふっと力が抜けたのを感じた。

メイコさんは、ゆつくりと顔を上げた。潤んだ瞳からは歪んだ色が消えて、静かな湖面を思わせる黒に透き通っていた。

「……あたしもね、ちょっとだけ、本気になってた」

震える唇を静かに解く。キセ氏は頷きながらメイコさんを見る。

「あいつが色々調べて、この店なら楽勝だって言ってさ。あたしもその気になって、ここに入って。一ヶ月もいればいいって思ってた。あんたにうまいこと取り入って、金さえ手に入ればすぐに逃げ出せるって」

でも、違った、と掠れた声で小さく笑う。

「なんかさ、お客さんと話したり、お酒作ったり、手品するのが、すごく楽しくて……けどさ、本当のあたしは、あんたとはなんの縁も無い、ただの馬鹿な女だからさ。それを忘れるなんて都合いいこと、しちやいけなかった」

「だから、出て行った？」

メイコさんは頷く。長い髪がさらりと前に流れ片目を隠したが、それも直さず彼女は続ける。

「あたしはここにいちやいけないって思った。それであいつのところに帰った。けど、もうそこにもいられなくなっちゃった」

結局あたし、ただの金づるだったみたい、と乾いた声で笑う。

本当に居場所の無くなったメイコさんは、ふらふらと酒を飲み歩いて、いつの間にかこの古ビルにたどり着いていた。普通なら絶対に騙した相手の下に戻ることなどないのに、気がつけば店の前にいたのだという。

なんでかな、とメイコさんは呟いた。何で、何でだろ、と自らに問い幾度も呟いた。

「許してもらえろわけ無いのにね。騙された者同士、一緒にいたって仕方ないのにね」

柔らかな陰がメイコさんの顔を縁取る。何も見ない目で、空に向かい、メイコさんはふっと静かに笑った。

「あたしも、信じたかったのかな」

不意に、キセ氏は立ち上がり、すつと右手を差し出した。

「さあ、ここには不思議なトランプがある。正直者にも不屈き物にも、誰の目にも見えない、不思議なトランプ。これより、奇跡をお目にかきましょう」

静まり返った店の中に、キセ氏の朗々とした口上が響く。優しい顔立ちからは想像もできないよく通る声に、メイコさんは思わずびっくりして顔を上げた。

目の前にすつと立つキセ氏は堂々と胸を張り、ぴんと背筋を伸ば

している。そうしていると意外と背が高いということに、今更のよ
うにメイコさんは気づいた。

力強い笑顔で、キセ氏は見えないトランプを両手で広げ持ち、呆
気にとられるメイコさんにそれを差し出す。

「さあ、一枚選んで」

戸惑いながらも、メイコさんは一枚引く仕草をする。キセ氏は芝居
がかった仕草で眉を上げ、

「そのカードでいいんだね？」

確認し、

「では、そのカードを覚えて」

強く、心に念じて！

言いながら、見えないトランプを切る。

突然のことにどうして良いか分からなかったが、メイコさんは言
われるままに一つの絵柄を思い浮かべた。

「……覚えた」

頷くと、キセ氏は透明なトランプを扇形に広げる。

「この中の好きな場所に、そのカードを差し込んで」

メイコさんは、見えないカードを指でつまみ、そつと扇の中に戻す。
キセ氏はカードの山を整えると、それを二つに分け、重ね、また
二つに分け、と素早くシャッフルし、滑らかな手つきで混ぜていっ
た。

やがて、キセ氏は静かな手つきでトランプをテーブルに置いた。
そしておもむろにカウンターの裏に回りこみ、下から何かを取り出
した。

古いパラロイドカメラがメイコさんの目の前に現れた。

「さあ、さっきのカード、覚えているね？」

メイコさんは頷く。キセ氏は、よろしい、と透明なトランプを、位
置を違わずすと持ち上げ、一枚引き抜いた。続いて胸ポケットか
ら見えない何かを取り出し、上部を掴んで引っ張る仕草をする。

「透明なペンだよ」

言いながら、キセ氏はカードに何かを書くように手を動かし、透明なキヤップを閉め、再び胸ポケットに手をやった。見えないカードに見えないペンで見えない文字を書き、キセ氏はそれをメイコさんの前に置くように手を出した。

「さっき君が選んだカードにね、私からのメッセージを書いておいたから」

「見えるわけじゃない。そんなもの無いんだから」

キセ氏は笑って首を横に振る。そして、ゆっくりとした手つきでポラロイドカメラを持ち上げ、メイコさんに向ける。

「額に手を当てて、さっきのカードを強く思い出して」

「……」

「さあ。君が信じてくれれば、見えないカードは姿を現す」

メイコさんは、そつと右手を額に当てた。目を閉じ、先ほど選んだカードを思い浮かべた。

赤く輝く柔らかな心の形。

遠い昔の少女が好んだ数字。

パチッ、と軽い音がした。

メイコさんが目を開けると、目の前のカメラから写真が吐き出されていた。キセ氏はそれを手に取り、テーブルの上に置く。

2人が見守る中、薄灰色の艶やかな紙に、段々と像が浮かび上がってくる。

薄暗い店内。壁にかかる装飾用のランプ。木でできた仕掛け扉。

瞳を閉じ一心に念じるメイコさん。

その頭の上には、宙に浮かぶカード

メイコさんはぱつと写真を手に取り、食い入るように見つめた。

自分の頭上にくっきりと写るのは紛れもなく見えないトランプの中から選んだ、メイコさんの心の中のカードだった。

ハートの7。

その空白部分には、黒い文字が描かれている。

小さなその文字を、メイコさんは目を近づけて必死に読み取った。

「あ……」

文字の羅列が意味を成した途端、メイコさんは一言も発することができなくなった。胸の奥に温かなものが広がり、塊となつてぐつとこみ上げる。それは涙に変わつて、猫を思わせる美しい瞳から大粒の真珠を連ねたようにいくつも零れ落ちた。

メイコさんは写真をテーブルに置き、両手で顔を覆った。

「ね、奇跡は起こつただろう」

メイコさんは幾度も幾度も頷いた。

幼子のようにしゃくりあげるその華奢な肩を、キセ氏は優しく叩いた。

風音が静かに店の中に入り込み、寄り添う二人の周りで柔らかな声のように響いていた。

誰かに職業を訊かれると、キセ氏は必ず、

「人を騙す仕事です」

と言う。

言われた方はたいていの場合キセ氏が冗談を言っていると思って笑うか、真意を汲み取りかねて曖昧に笑うか、まじまじと彼の顔を見る。たまに真顔で詐欺師ですかと問う人もいる。

「ああ、マジシャンですか」

と頷いてくれるのは、ごく一部の勘の冴えた人だけだ。

分らない人には自分から正体を明かすが、キセ氏はいつも、
「手品師です」

と控えめに言う事にしていた。「マジシャン」なんて呼び名、何だか大げさじゃないか。

遠くになだらかな山々が青く霞む町の、繁華街の外れ。古いビルの4階にキセ氏の店はある。

5席のカウンターと3つのテーブル席がひしめく小さなバーはひっそりと物静かながらもどこか温かな佇まいで、キセ氏の人柄をそのまま反映したかのようだ。

来店する客は常連もいれば噂を聞いた新参者もいて、老いも若きも止まり木の鳥みたいに肩を寄せ合い、カウンターに腰掛けている。そのお目当ては2つ。

1つは、キセ氏の若き姪、メイコさんの作るカクテル。

秘密の薬のように立ち並びキュールやジュースは、明るくお喋りするメイコさんの手の中で鮮やかに混ぜ合わされる。魔術のような手つきにお客が見とれているうちに、あつという間に、見目よくしく味も良い、素敵な飲み物が出来上がる。

そしてもう1つが、キセ氏の手品。

ぱっと見は優しげながらもどこか頼りない風貌のキセ氏が、その

両手を駆使するとあら不思議。カードは宙を舞い、心の奥底の思いは読み取られ、見えないものが立ち現れる。奇跡としか呼べない不思議な出来事が次々に起こる。

お客はメイコさんのカクテルに酔いしれ、キセ氏の手品に酔いしれ、そして口々に呟く。

「なんて素敵！なんて不思議！」

その度に、店主とその姪は2人して顔を見合わせ、にっと笑い、お客にお辞儀をするのだ。

メイコさんはキセ氏の弟子でもあるので、たまに手品を披露することもある。腕はまだまだで、時にはタネがばれそうになって慌て、

「続きは叔父さん！」

と無理やりキセ氏にバトンタッチする事もある。キセ氏は苦笑してそれでも鮮やかに代役をこなす。メイコさんは美しい瞳を見開いてじっと見つめ、いつだってお客と一緒に大喜びする。

夜の底にひっそりと佇む小さなバーで、手品師と、手品師の姪は、奇跡を生み出している。

ささやかで、美しい、驚きと喜びを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171p/>

手品師の姪

2011年7月18日14時04分発行